

無知は偏見を生み、無関心は差別を育てる

神河町立神河中学校三年 前嶋 彩花

皆さんは「ハンセン病」という病気を知っていますか。「ハンセン病って何？」そう思った人もいるかもしれません。実は、私も最初は何も知りませんでした。人権問題について調べていたとき、私は「ハンセン病」という言葉に出会いました。それまで名前を聞いたことはあっても、どんな病気なのか、どんな歴史があるのか、私は何も知らなかったのです。ハンセン病について調べてみました。調べていくうちに、この病気にかかった人たちが、長い間ひどい差別を受けてきたことを知りました。病気になったというだけで家族と引き離されたり、自由を奪われたりした人がたくさんいる。その事実を知ったとき、私はとても驚き、そして強いショックを受けました。

ハンセン病は昔、「らい病」と呼ばれていました。皮膚や神経に影響が出る病気です。外見が変形することもあります。そのため、昔の人は「うつる」「こわい」と誤解し、患者さんたちを遠ざけたり、隔離したりするようになりました。でも、実際にはハンセン病は感染力が弱く、しかも今では薬で治すことのできる病気です。しかし、誤解や偏見は簡単には消えず、患者さんやその家族まで、長い間ひどい差別を受けてきました。例えば、子どもなのに親と引き離され、特別な施設に入れられたり、大人になっても結婚や仕事を断られたりしました。中には、自分の本名を名のれないまま生きてきた人や、亡くなった後も家族に名前を残してもらえなかった人もいます。こうした話を知って、私は「これは病気の問

題ではなく、人の心の問題なんだ」と思いました。病気がこわいのではなく、「知らないこと」がこわいのだと思います。知らないから誤解が生まれ、誤解が差別につながっていく。これはハンセン病だけの話ではありません。外国から来た人に対して、障がいのある人に対して。それだけでなく、私たちの日常的な会話から生まれる誤解やうわさが差別やいじめにつながってしまっています。私たちの身のまわりにも、同じようなことがたくさんあると気づきました。

では、差別をなくすために私たちにできることは何でしょうか。それは、まず「知ること」です。正しい知識を知ること、間違っていたイメージや思い込みをなくすことができます。そして、知ったことをまわりの人にも伝えることです。もし、差別や偏見の言葉を聞いたら、勇気をだして「それは違うよ」と言ってみる。そういった積み重ねが、やがて社会を変える力になると私は信じています。私は今、こうしてこの作文を通して、皆さんにハンセン病のことを伝えていきます。聞いてくれた皆さんが「そんなことがあったんだ」「それはひどい」と感じてくれたなら、それだけで差別をなくすための第一歩です。これからの社会をつくっていくのは、私たち一人ひとりです。だからこそ、自分の言葉で、人の痛みを知り、優しさを広げていきたいと思っています。

最後に、私がハンセン病について調べていて出会った言葉を紹介します。それは「無知は偏見を生み、無関心は差別を育てる」という言葉です。知らないことをそのままにせず、知ろうとすること、そして誰かの苦しみに心をむけること。その気持ち、差別のない社会をつくる第一歩になるのではないのでしょうか。私はそう信じています。

